

1

(4・5・6・9 各完答)

1 十人十色

2 やる気

3 イ

4 1
イ
2
ウ
3
ア

5 効
定

6 必要
する

7 I
(記述題)

II
ウ

8 工
9
I
ウ
II
ア

10 a
研究

b 満足

c 関係

2

(3・4・8 II・10・11 各完答)

1 a
作戦

b 生意気

c 察
する

d 追放

2 ウ
3
い
側

4 1
ウ
2
エ

3 ア
4
イ

5 おせっ
かい

6 行動

7 ウ

8 I
側近

II
必
た

9 ア

10 自
た

11 ク
一

1

7 I

よ	種	ギ
う	の	ヤ
と	緊	ツ
考	張	プ
え	状	が
る	態	生
か	を	み
ら	解	出
。	消	す
	し	一

(同意可)

配点

1 10 2 1 各2点×7=14点

1 7 I 6点

その他 各4点×20=80点

100点

①

- 1 「人によってさまざま」という意味と、「同じ漢数字を二回使う」、「四字目の総画数」というヒントを組み合わせて考えよう。
- 2 本文の中で頻出であり、全体の話題に深く関わる語句である。何についての文章なのかを常に念頭に置いて読み進めたい。
- 3 線③を含む一文を読み、どのような「性質」があれば「手に入れること」につながるのかを考える。指示内容を探して段落をたどると「それはみなさんも…」とさらに指示語が見つかり、「人間の性質」にたどりつけるだろう。
- 4 (1) は前文の内容を受けて「目標を立てること」を勧めているため、「そこで」が入る。(2) は目標設定の具体例として「テストの点数」を挙げているため「たとえば」が入る。(3) は「その人の生き方、人生哲学、人生そのものでも呼ぶべきもの」を「自分がどのように生きていきたいか」と言いかえているので「つまり」が入る。
- 5 線④を含む一文に「目標設定のやり方」という表現があるが、ここは設問の指定に合わない。筆者は「目標を立てること」を勧めてはいるが、心理学者ロツクの言葉を引用して単純に目標設定さえすればよいのではないということ述べている。
- 6 ⑤を含む一文では目標の設定がやる気を高めることにつながるものの「二つ目の理由」について述べている。この「二つ目の理由」については必ず後続の段落で説明がなされているはず、と通読時から考えて読み進めてほしい。
- 7 Iでは「テスト」の具体例のあとに書かれている「ギャップ」の持つ働きを答えればよい。字数制限に合うように答えを作り上げよう。IIでは目標を「設定する」ためではなく「達成する」ための努力であることを文脈から読み取ってほしい。
- 8 「二〇点を補うために」とあるので、当然XとYではYの方が大きくなる。Zは「先の例」、つまりYと同一であることに気付けると容易であろう。
- 9 I・IIを含む一文は「このように」からはじまり、「なぜ、目標を設定することが、やる気を高めることにつながる」のかという問いかけに対する答えのまとめとなっている。一つ目、二つ目それぞれの理由の部分から関連する言葉を読み取り、対応した選択肢を選ばばよい。
- 10 a「究」は同音の別字「求」としないように。b「満」は十と十二画目を正しく書こう。c「係」はにんべんの書き忘れに注意したい。漢字の学習に際しては、なぜその字が使われるのか、文脈を意識することが大切である。

②

- 1 それぞれ文脈に沿った漢字を適切に答えよう。b「生意気」は「一人前あるいはその地位でもないのに、偉そうな態度やふるまいをすること」という意味。「生息」と書かないように注意しよう。c「察」はうかんむりを書き忘れたり、「札」や「刷」などの同音異字と混同しないように注意したい。
- 2 圭機は、オウムが「自分の発言を補強して」いるのではなく「機械的に繰り返しているだけ」であることに気づいたとあった。オウムが自分と同じような意見を持っていたわけではなく、オウム自身のポジション確保が目的であったことにいらだちを覚えていたのである。「同情」とは他人の気持ち汲んで憐れみ、思いやることなので不適である。
- 3 線②を含む一文を読むと、鈍ペイのかわりにオウムを「突き落としてやりたい」と考えていることがわかる。いじめられている「鈍ペイ」の立場にオウムを追い込みたいと考えているのである。
- 4 (1) は突然投げかけられた圭機からの言葉に反応するオウムの様子を表す「ビクツと」が入る。後の部分で「圭機のこと怖くて怖くて…」とあったことにも注目したい。(2) は直後の「笑った」につながる「にやりと」が入る。(3) は自転車とオウムがぶつかった際の衝撃で折れ曲がった傘の様子を表す「ぐにやりと」が入る。(4) は鈍ペイからの質問にオウムがうなずく様子を表す「こくつと」が入る。
- 5 「おせっかい」とはでしゃばって世話を焼くことを表す言葉である。直前の「歩きながら携帯さわると、コケたりして危ないだろ？」を指しているが、もちろんこれは圭機が本心からオウムに伝えたいことではない。
- 6 ④もまたオウムなのだ」とあり、直前の「言葉のオウム返しだけではない」と並列されていることに注目したい。また、直後の「すぐ後ろについて真似てくる」も手がかりになるだろう。あとは設問の指定に注意しつつ、適切な熟語を考えよう。
- 7 圭機の「予想」が問われているので、実際に起きたことは答えにはならない。ここで圭機は「自転車」とオウムの衝突寸前での回避を狙っているため、アの「白い乗用車」は不適である。
- 8 中略以降で、オウムの本心やそれに対する圭機の考えが描かれていた。Iは前後の「まるでくように」に注目したい。IIは事故の後にオウム自身が「圭機のこと怖くて怖くて、とにかくいじめられないように必死で機嫌を取っていた」と話しているところに注目すればよい。
- 9 「結局のところ」という指定に注意してほしい。線⑦の少し後で、圭機は鈍ペイの「すばらしい反撃」に対して「感動に近」いものを素直に受け止めている。オウムが「微かに笑った」のも、鈍ペイの行動を受けてオウムが鈍ペイを仲間と見なしたと考えられる。なお、中略よりも後で「押していないのに押したと言いきるやつら」と表現しているのはオウムと鈍ペイのことであり、ここでも「まぶしかった」と評価している。
- 10 事故の当事者であるオウム本人は、圭機が背中を押したかどうかはわかっているにもかかわらず鈍ペイの言葉にうなずいた。その様子を見て、圭機はオウムの本心を知ったのである。だからこそ圭機には「微かに笑ったように見えた」のである。
- 11 「中略より前の部分」という指定に注意しつつ、圭機がもともとどのような存在であったのかを考えよう。オウムが顔色をうかがい従っていたり、クラスメートであるオウムを「側近として扱ってやっていた」と言えるような立場であった。線⑨の直後にある「クラスを中心人物」と同意の表現を探せばよい。